

日中関係におけるテレビ番組の役割に関する一考察  
—『岩松が日本を見る(岩松看日本)』の分析を例に—  
(2014)

The Role of the Television Program in Japan-China  
Relation,  
For Example of the Analyzing of Yansong Japan Close-up(2014)

◎丁 偉偉

Weiwei DING

同志社大学社会学研究科メディア学専攻 Doshisha University, Graduate School of Social Studies

**要旨** 本論は、2007年3月19日から4月6日にかけて、中国中央テレビの1チャンネル(CCTV1)で放送された、日本を紹介する特別番組——『岩松が日本を見る(岩松看日本)』を主な研究対象として取り上げ、当番組が持つ、日中関係を促進する役割について検証したものである。日本メディアの関連報道(テレビ、新聞)と比較分析した上で、日中メディアにおける認識のギャップを明らかにした。

**キーワード** 国際コミュニケーション 相互理解 日中関係 メディア報道

## 1. はじめに

1972年の日中国交正常化以来、民間交流に支えられる政府間の友好関係は、90年代前半まで盛んであった。しかしそれ以降、東アジア諸国の力学的なバランス(再編)の動きが活発化し、善隣友好原理を基にした「1972年体制」の崩壊が始まり、両国の関係に大きな悪影響をもたらした(国分 1997; 岡部 2006; 毛里 2006; 家近 2007)。特に、2001年から2005年の5年間に日本の総理大臣を務めていた小泉純一郎の靖国神社参拝をめぐる問題に加え、尖閣諸島問題により、2005年は中国各地で反日デモが起き、日中関係は冷え込んだ。そうした状況を改善するために、政権交代で総理大臣に就任したばかりの安倍晋三は2006年10月に日本の首相として5年ぶりに中国を訪問した。日中共同のプレス発表がなされ、日中関係改善の動きが始まった。そうした環境変化の中で、中国中央テレビの第1チャンネル(CCTV1)は、日本を紹介する特別番組——『岩松が日本を見る』(中国名『岩松看日本』)を放送した。そのことが中国のオーディエンスに新たな日本イメージを伝える上で一定の役割を果たし、両国民の相互理解を促進するきっかけとなった。そうした環境作りの後、2007年4月11日、中国の温家宝総理(当時)が日本を訪問し、日中関係を「戦略的互惠関係」と位置づけ、新たな共存共栄の道を歩み始めた。

しかし、2010年に尖閣諸島(中国名: 釣魚島)沖で日中船舶の衝突事件(以下、尖閣諸島衝突事件)が発生し、日中両政府

の不適切な対応によって、両国の関係に深刻な打撃を与えた。また、2012年は日中国交正常化40周年記念に当たる年であったにもかかわらず、日本による「尖閣諸島国有化」問題の悪影響で日中政府間のハイレベル交流が絶たれた。その後、日中の政権が共に交代し、2006年9月～2007年9月に総理大臣であった安倍晋三が12年12月に再び総理大臣として選出され、第二次安倍政権が発足した。しかし、06年から07年の間に政府間のハイレベル交流を通して日中関係の改善を果たした第一次安倍政権と異なり、第二次政権では尖閣諸島及び靖国神社参拝をめぐる問題で中国との対立が深まり、いまだに冷え込んだままの日中関係を改善する目処が立っていない。

1950年代からの「民間外交」、「友好運動」と称される戦後の中日における民間交流をはじめとして、様々な努力と模索を積み重ねることによって、1972年に日中国交正常化が実現した。そうした政治・外交・社会の歴史を踏まえ、日中関係の改善のためには両国共にこれまでの困難な時期を乗り越えてきた過去の知恵から学び直す必要があると筆者は考える。本稿はそうした視座から、『岩松が日本を見る』を一例として、国際理解を促進するテレビ番組のあり方と国際関係のポリティカルエコノミーをコミュニケーションの面から再検証したものである。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、まず①2003年～2012年までの日中関係を整理した上で、2007年を区切りとして、二つの期間(2003年～2007年；2008年～2012年)を選んで比較し、時期的特徴と相違点を分析することで、日中関係に影響を与えた要因、マスメディアの役割及び国家権力の対立と互恵関係について考察することである。そして、②『岩松が日本を見る』の内容分析によって、当番組の特徴を明らかにし、メディアが日中関係改善のために果たすべき役割について検討する。また、③日本のメディアの関連報道を比較・分析することで、当番組に関する日本の認識・態度を明らかにする。④それらの検証を基本にして、当番組の限界、及び今後の国際コミュニケーションの円滑化に貢献できる番組のあり方に資する提言が可能になるであろう。

## 3. 研究対象と研究の方法

本稿の研究対象は、①日中国交正常化35周年を記念するために、中国中央テレビの第一チャンネル(CCTV1)での人気番組、「東方時空」で21回シリーズとして制作・放送された、日本を紹介する特別番組——『岩松が日本を見る』(放送時間：2007年3月19日～4月6日)である。また、②この番組に関する日本メディアの関連報道(テレビ番組——NHK総合放送の『News watch 9』、国際放送(NHK WORLD)の『News Today 30 minutes』；新聞——読売、朝日、毎日、産経)も参考資料として分析する。ちなみに、「岩松(Yang Song)」とは、独自の見解で国内外情勢を分析し、一般のオーディエンスから高い評価を得ている、中央テレビの人気キャスター白岩松のことである。彼をはじめ、合計8名の取材チームは07年3月4日から20日間、日中政府とNHKの協力で日本に滞在し、政治、経済、文化、社会などの各分野の取材と、日本社会の各界著名人へのインタビューを行った。「あなたの知っていそうで知らない日本を今回一緒に発見しましょう」という番組キャッチフレーズに示されるように、「知らない日本を了解する」というテーマに基づき、中国のオーディエンスに客観的かつ全面的に日本を紹介することが当番組の主旨である。

研究方法としては、日中関係の歴史的な背景を踏まえ、『岩松が日本を見る』と日本メディアの関連報道についての内容分析を行う。まず、①番組の構成に関して、シリーズの回数、放送時間の長さ、制作構成、所属カテゴリーを定量分析する。それを踏まえ、②番組内容を「人物インタビュー」、「ロケ収録」、「スタジオ収録」に分類し、定性的分析を行う。また、③当番組の映像分析と合わせて、番組のキャッチフレーズ、インタビューの質問事項、番組シリーズのテーマ、リポーター役を務めた白岩松発言の言説分析を行うことにより、当番組に見られる国家権力からの影響とそれに抗するメディア側の自律／自立性について検証する。最後に、④『岩松が日本を見る』についての日本メディアの関連報道を報道時間、内容、注目点、及び当番組に対する認識を内容分析によって全体像を描き検証する。

## 4. 『岩松が日本を見る』・日本の関連報道の分析結果

2003年～2012年までの日中関係を整理した上で、2007年を区切りとして、選出した二つの期間(2003年～2007年；2008年～2012年)を比較・分析した結果、尖閣諸島問題をはじめとする様々な問題は、日中関係に悪影響を与え、政府間のハイレベル対話や交流を一時的に中断させたという共通点が見られる。いまだに冷え込んだままである日中関係と異なり、2006年～2007年の日中政府間のハイレベル交流は、日中関係を改善し、両国民の相互理解を促進する特別番組『岩松が日本を見る』の放送を可能にさせた。この点から考えると、日中の安定した友好関係の構築には、政府間のハイレベル交流とマスメディアによる

生活レベルで相互理解を促す情報提供が、共に必要であることが明らかになった。

また、『岩松が日本を見る』における「人物インタビュー」の「日中友好への貢献」という主旨と合わせて、「ロケ収録」部分における日本社会の描かれ方を分析した結果、日中の共存共栄、互恵関係確立の重要性が明らかになった。抽象的かつ政治的な「日中友好」より、当番組のように、経済・文化・社会等々の多方面から具体的な共存共栄策を導き出したほうがより効果的なのである。加えて、「人物インタビュー」はもちろん、それ以外の「ロケ収録」や「スタジオ収録」による番組内容も、国家としての「日本」より、日本で暮らしている「日本人」に焦点を当てて取材したことが大きな効果を発揮していることがわかった。また、この『岩松が日本を見る』では、それまでのマスメディア報道によく登場した「日本」を国家による政治の枠組概念から見るやり方から、日本人の暮らしている「日本社会」に対する注目へと転換させ、「日本」より「日本人」を見るというコンセプトが成功していることが明らかになった。一方、当番組の中で歴史・戦争に関する内容を分析したところ、日中の友好関係を構築するには、歴史・戦争に関する内容が過度になることは逆効果になりかねないが、回避することもできないことがわかった。歴史問題と戦争への反省は中国の国民にとって、対日感情に関わる重要な問題意識であり、人倫面からも今後の両国関係において避けて通れないからである。要するに、『岩松が日本を見る』は、中国のオーディエンスに日本、及び日本人を新たな観点から認識させ、深層レベルにおいて決して小さくない役割を果たしたことがわかった。

また、『岩松が日本を見る』についての、日本メディアの関連報道を分析した結果、テレビ放送は、共に当番組による日中関係の改善を期待しているが、NHK 総合放送より国際放送のほうが当番組の主旨をより深く認識したことが明らかとなった。そして、新聞を中心とした報道はテレビ放送よりも、当番組の日中関係の改善効果に慎重な意見を持っていることがわかった。

## 5. 7年後の検証・今後の課題

日中関係正常化後の42年間に日中関係を促進する番組は、日中両国のメディアで多数制作されたにもかかわらず、『岩松が日本を見る』のような多角的かつ客観的に日本を紹介するものは極めて稀である。それ以降、日本への取材は増えたが、類似する番組は見当たらない。また、この数年間、来日した中国人観光客が激増しているにもかかわらず、尖閣諸島問題や靖国神社参拝をめぐる問題で日中両政府はハイレベル交流をストップさせており、両国民における相互誤解は深まる一方である。その結果、政治間のハイレベル交流が再開しても、両国民の間に累積した負の感情はそう簡単に払拭することはできないであろう。それ故、国際コミュニケーションにおける相互認識を促進するメディアの責任が問われるべきである。この視点から、当番組の意義と限界を検討してみる。

7年間の年月経て、いまだに冷え込んでいる日中関係の現状から見ると、『岩松が日本を見る』による日中関係を改善する効果には限界があることは確かである。しかし、当番組が果たした対日理解を深める役割は評価すべきであろう。以下は当番組の限界について取り上げたものであり、健全な日中関係を構築するにあたって解決しなければならない問題でもある。

まず、①伝統文化（相撲、落語）、日本食（うどん、寿司、河豚料理）、若者ファッション（渋谷、新宿）、及びアニメ文化（鉄腕アトム、ドラえもん）に関する紹介は、若者にとって一番人気がある話題であり、対日認識へ踏み出す第一歩ともいえる。しかし、グローバル化社会の発展とともに、これらの情報は簡単に接触できるようになった。その結果、対日認識をさらに深めなければ、単に表面的な認識にとどまり、本当の対日理解は難しくなるであろう。そして、②『人物インタビュー』の中に、浜崎あゆみ以外のインタビューを受けた人物は中高年であり、1980年代頃に日中友好関係の架け橋になった経歴に共通点が見られる。ここで注意すべきなのは、1980年代より今日の日中友好関係の架け橋に当たる人材の断層現象である。番組の中で、日中21世紀東アジア青少年大交流計画（2006年開始）に選ばれた、中国の高校生の日本での日常生活を紹介した場面がある。彼を担当した先生の話を用い、今後の健全な日中関係を構築するために、対人コミュニケーションによる相互理解の重要性を明らかにしたい。

「国対国じゃなくて、人対人が相互的に理解を深めるという意味で、とても意義深いと思いますね。ですから、その観点から、潘くんみたいな選りすぐりの代表者だけではなくて、もっとたくさんの中国人の生徒が日本に来る、そして日本から中国のほうにたくさん生徒が行って、これがもっと盛んになることを私は望みます。」

対人コミュニケーションが直接体験できない人々にとっては、マスメディアにおける国際コミュニケーションの役割は非常に重要である。今後の日中関係の改善には、国家の意思決定が非常に重要な要因である。しかしそれだけでなく、二国間の政治的力学関係を越えた、様々な情報ネットワークを利用した民間間の相互理解を促進することがマスメディアの役割として欠

かせない。

## 参考文献

- 1) 家近亮子・松田康博・段瑞麟編著 (2012) 『岐路に立った日中関係—過去との対話・未来への模索—』改訂版 晃洋書房
- 2) 石田英敬 (2003) 『記号の知/メディアの知—日常生活批判のためのレッスン』東京大学出版社
- 3) 岡部達味 (2006) 『日中関係の過去と将来—誤解を超えて』岩波書店
- 4) 工藤泰志編 (2008) 『中国人の日本人観 日本人の中国人観』言論NPO
- 5) 国分良成・添谷芳秀・高原明生・川島真 (2013) 『日中関係史』有斐閣
- 6) 園田茂人編 (2014) 『日中関係史 1972—2012 IV民間』東京大学出版会
- 7) 高井潔司編 (2005) 『日中相互理解のための中国ナショナリズムとメディア分析』明石書店
- 8) 高原明生・服部隴二編 (2012) 『日中関係史 1972—2012 I政治』東京大学出版会
- 9) 中国社会科学研究会編 (2010) 『跨世紀中日关系研究』社会科学文献出版社
- 10) 村田忠禧 (2013) 『日中領土問題の起源—公文書が語る不都合な真実』花伝社
- 11) 毛利和子 (2006) 『日中関係—戦後から新時代へ』岩波書店
- 12) 矢吹 晋 (2013) 『尖閣問題の核心—日中関係はどのような』花伝社
- 13) 劉江久 (2007) 『日中関係二十講』中国人民大学出版
- 14) 劉建平 (2010) 『戦後中日関係：不正常历史的过程与结构』社会科学文献出版社
- 15) 渡辺武達 (2012) 『メディアへの希望—積極的公正中立主義からの提言』論創社